様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１９３

研究課題名（和文）スペインにおけるブラジリアン・ディアスポラの宗教実践に関する実証研究

研究課題名（英文）An Experimental Study on Religious Practice in Spain by Brazilian Diaspora

研究代表者
山田　政信（Yamada, Masanobu）

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：７０４３４９７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ブラジリアン・ディアスポラが生み出す宗教運動の次の側面を明らかにした。①ブラジルで生まれたプロテスタント教会のスペインと日本での展開。②信者のスペインと日本への適応の社会的背景。③信者の移動に見られるトランスナショナル性。④移民1.5世信者のアイデンティティの行方。⑤アセンブレイア・デ・デウス教会とブラジル人カトリック教会のスペインでの展開。⑥イギリスにおけるブラジル系宗教コミュニティの状況（予備調査）。また、欧州地域における移民・難民と宗教の関係性についての文献資料の整理・分析を進め、移民がもたらす外来の宗教の、ホスト社会の既存の宗教に対する影響に注目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、宣教活動や教会権力によってでなく、信者ネットワークがトランスナショナルな宗教運動の発生と拡大に有効に働いた事例を検証し、個人レベルの信頼関係が生むグラスルーツ的な活動が、人々の移動、移動先での定着、そして移動後の祖国との繋がりに寄与していることを明らかにすることで、移民にとって宗教が流動的なグローバル社会を生き抜くツールとしてポジティブに機能していることを示した。本研究が用いた「下からのグローバリゼーション」という視点は人のつながりの社会的有用性を意味している。また、本研究は移民がもたらす外来宗教の、ホスト社会の既存の宗教に対する影響を考察する上で示唆を与えることができる。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the following aspects of religious movements created by Brazilian diaspora. 1). Development of Congregacion Cristiana in Spain and Japan, which was originally formed in Brazil. 2). Social background of its followers' adaptation to societies in Spain and Japan. 3). Transnationality observed in their migration. 4). Identity issue of the followers as 1.5 generation immigrants. 5). Development of Assembleia de Deus and Brazilian Catholic Church in Spain. 6). Preliminary research on the circumstances of Brazilian religious communities in England. In addition, this study collects and analyzes literal materials regarding the relationship between migration/refugee and religion in Europe and focuses the influence of foreign religions brought by immigrants on existing religions at host societies.

研究分野：宗教学

キーワード：移民　宗教　ブラジル　スペイン　プロテスタント教会　カトリック教会　ディアスポラ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者による「日本産ブラジル系プロテスタント教会のトランスナショナルな宗教実践に関する研究（科研費基盤研究（C）研究課題番号：23520090）」の研究視角を維持し、ブラジリアン・ディアスポラの宗教実践に見られるダイナミックな動態を考察すべく、対象地域としてスペインを取り上げた。スペインのブラジリアン・ディアスポラのさきがけは 1980 年代頃からで、ダンサーや歌手といったサービス業に従事する女性が多かった。1990 年代に建設業や工場で働く男性が増えるようになり、家族帯同の移動が増加したのは 2000 年に入ってからである。本研究を開始した当初、研究代表者は当初の分析対象であるコングレガシオン・クリスチアナ教会（以下、コングレガシオン教会）から調査許可を取っており、同教会について基本的な情報を入手していた。すなわち、同教会の発展も 2000 年以降になってからのことであり、約 3000 人の信者のほとんどがブラジリアン・ディアスポラであること、ブラジル人の移民が多いカタルニア州、マドリード市、ガリシア州を中心に活動し、スペイン国内に約 20 か所の教会がある、ということである。そこで研究代表者が注目したのは、信者が国境を自由に超えて移動するというこの教会に見られるトランスナショナル性という特徴だった。この特徴は、筆者がこれまで調査した他の教団宗教との比較において際立っているように思われた。

２．研究の目的

本研究は、スペインに移住したブラジル人で、「ディアスポラ」として生きる「祖国を離れて暮らす人々」のネットワークと移動に宗教がいかに機能しているのかを明らかにする。本研究の問題関心は、宗教研究におけるグローバル化と移民と宗教、移民研究におけるトランスナショナルな人々の越境である。

３．研究の方法

A)ブラジリアン・ディアスポラのスペインと日本への適応における宗教の機能を探求するために、コングレガシオン教会の基礎的資料の収集と信者へのインタビュー調査を行う。

B) ブラジリアン・ディアスポラの宗教的側面の実態把握を行うため、コングレガシオン教会以外にも、カトリック教会、アセンブレイア系プロテスタント教会の信者へのインタビュー調査と質問紙調査を実施する。

４．研究成果

（１）コングレガシオン教会のスペインと日本での展開

スペインと日本のコングレガシオン教会は、教団が布教拡大戦略の一環として拠点設立を主導せず、布教活動に熱心な個人が強烈な宗教的信念に駆られて信者を増やしたということもなく、あくまでも複数の信者が主体的に集まりたいという願いで結実していることを特徴に挙げることができる。

スペインのブラジリアン・ディアスポラの教会のなかでコングレガシオン教会は一番規模が大きく組織化されている。信者数は約 3000 人とみられ、国内に約 50 か所（2018 年）の拠点がある。新たな拠点を開くには、ブラジルの本部教会から長老が派遣され、公式礼拝式を行うことが必要である。ガリシア州では 1959 年から、カナリア諸島では 1974 年から、カタルニア州では 1985 年から活動しているが、最初の拠点は小さな家庭集会だった。現在のように活動が活発化したのは 2000 年以降である。スペインではブラジル人人口が最も多いバルセロナ市近郊に 5 か所の教会があり、信者数は約 400 名である。1999 年には教会として使用する家屋を購入し、スペインの中央教会として機能している。

信者らはブラジルからスペインに就労目的で移動するにあたり、『報告書』と呼ばれる住所録で拠点（教会）の住所を確認するか、既に移住した知り合いの信者に教会の住所を聞いたうえで移動することが多い。そのため、多くの教会は信者ネットワークの結節点として結実し拡大している。しかし、イビサ島の教会（信者数約 10 名）のように信者夫婦が布教して教会が開かれたという例外的とみられる事例もある。

この教団ではナショナルおよびトランスナショナルな信者間の交流が盛んである。EU 圏では正規滞在者は自由に動けるという地の利を生かした活動がみられる。トランスナショナルな移動では、教義解釈の検討を目的とした教会役職者の年次大会が本部教会のあるブラジルで毎年行われ、長老の役にある信者が数名必ず参加している。その後、ヨーロッパ地域の大会がポルトガルで開かれ、地域の各教会から長老と執事が参加する。そのうえで、スペインの国内大会が、バルセロナ、マドリード、ビゴのいずれかの教会を会場に開かれる。国内大会が終わると、そこに参加した長老や執事が自教会に戻り、教義解釈の変更等を伝達する。

2018 年度の国内大会はバルセロナ教会が会場となり 8 月 31 日から 9 月 2 日まで 2 泊 3 日の日程で行われた。ブラジルとポルトガルから数名の役職者と、スペインに在住する役職者が約 80 名参加した。彼らの受け入れに当たる信者が約 120 名参加し、教会での食事準備や接待、役職者の移動のための運転手などの任に当たった。バルセロナ以外から訪れた役職者らは、たいてい信者宅で分宿する。たとえ初対面の来訪者でも信者である限り受け入れるという信者は少なくなく、それが信者間の信頼関係を深めている。また、普段からどの教会の集会にも国内や国外からの訪問者があり、証言の時間に信仰体験を語る姿を見かけることは珍しくない。こうした教会の特徴から、研究代表者は移動を常とした同教団信者らを「旅する文化」を生きる人々と呼ぶ。

日本のコングレガシオン教会（国内の正式名称は日本クリスチャンコングレゲーション）は、日本にデカセギに来ていた信者らが 1990 年に拠点を開きたいとブラジルの本部教会に連絡を取り、一人の長老が派遣されて同年 11 月 4 日に神奈川県厚木市の信者宅アパートで公式礼拝式が

行われたことに始まる。公式礼拝式に集まった信者は 17 名だったが、情報を得ることなく日本国内に分散していた信者は少なくなかった。その翌年には滋賀県、愛知県、静岡県、千葉県でもそれぞれ公式礼拝式が行われるようになっている。また、公式ではないが 1986 年頃からデカセギの信者が自主的に集会を開いていたことも知られており、ブラジルのプロテスタント教会で二番目に信者数が多いこの教団はデカセギ現象の当初から日本国内に信者が潜在し、結節点として教会を求めていたことがわかる。現在、日本国内に教会は 27 か所あり、恒常的な礼拝場として建物を借りている場所が 10 か所でそれ以外は公民館を集会場として借用している。

1990 年代初頭は携帯電話が発達しておらず、デカセギは公衆電話に高額な費用をかけてブラジルと連絡を取っていた。信者らは来日間もないころから言葉がわからず、慣れない仕事や習慣が原因でストレスを感じ、ブラジルに残した家族への郷愁や日々の寂しさから逃れるためにコングレガシオン教会を求めた。しかし、コングレガシオン教会は礼拝式でオーケストラを用いるように、他のブラジルのプロテスタント教会にみられない独自の特徴を持っている。信者らは独自の教会アイデンティティがあるゆえに、他のプロテスタント教会の集会に参加することは珍しい。日本に住む信者の連絡先を携えて来日した信者もいるが、そうでない場合はブラジルの教会や信者に電話したり、サンパウロの中央教会に電話で問い合わせて礼拝式を行っている場所を聞き出した。スペイン同様、日本でも地道な信者のネットワークの構築が教会活動を広げることにつながった。この教団では信者名簿を作らないことから実際の信者数はわからないが、年に一度開催される聖餐式に参加した信者数は 1,399 名（2017 年）だったことを踏まえると、国内の信者数の規模は 4,000～5,000 名程度だろうとみられる。

（２）コングレガシオン教会信者のスペインと日本への適応の社会的背景

このテーマを考察する際に念頭に置かなければならないのは各国におけるブラジル人の法的地位である。非正規滞在者はスペインのブラジル人に一定程度いるが、日本では極めて少ない。このことが信者の新天地での適応における教会の果たす役割に自ずと違いを生んでいるとみられる。

ブラジル人には移民として渡ったスペインや他のヨーロッパ諸国の子孫であることによる二重国籍者がいる。彼らには滞在や就労の自由が認められている。しかし、スペインを目指すブラジル人の中には 3 か月間の滞在許可のみで入国して超過滞在のまま不法残留している者が少なくない。これはコングレガシオン教会信者においても例外ではない。一方、スペインでは観光ビザで入国しても住民登録を行うことができる。このことがブラジル人の非正規滞在を促す要因にもなっている。この住民登録は就労条件を保証するものではないが、2000 年に制定された改正外国人法では非正規移民にも 18 歳以下の教育、緊急時の医療、基本的な社会福祉サービスの権利が与えられた。それゆえ不法就労を続けながら正規で働ける場所を見つけ定住しようとする移民は後を絶えない。

非正規でスペインに滞在するブラジル人の法的脆弱性を物質的かつ精神的に保障する機能を教会が果たしている。コングレガシオン教会では信者ネットワークが非常に機能していることは確認したとおりだが、彼らはスペインに移動するにあたり、また仕事を見つけるにあたってこのネットワークを積極的に活用している。教会がそのような信者支援活動を意図的に行っているわけではないが、到着後すぐの居場所や就職の紹介を信者が提供している。信者ネットワークは精神的な慰めのみならず、有効な社会関係資本の構築に繋がっていることがわかる。

日本の場合、1990 年に改正された出入国管理及び難民認定法により「定住者」の在留資格が創設され、就労可能な地位が日系 3 世まで与えられるようになった。その後始まるデカセギブームでは、ブラジルでの労働力募集システムと日本国内の業務請負業が一体になった「移民システム」で比較的安定した移住パターンがみられた。移住システムに様々な問題があったとはいえ、住まいと職を提供することで来日間もないブラジル人が路頭に迷うことを回避させた。それゆえ、信者には教会に物理的支援を望むよりも、来日して初めて宗教的必要性に迫られる者が多い。

（３）コングレガシオン教会信者の移動に見られるトランスナショナル性

信者はスペインや日本に移動する際、トランスナショナルな信者ネットワークを活用する割合が高いが、このような人との信頼のみならず、神への信仰に支えられて移動している。インタビューでは多くの信者がブラジルから移動を決意する前に、集会で「神が汝と共に行く」という神の言葉を得たと答えており、それゆえ移住は神に祝福された宿命だったと述べる。こうした宿命論に下支えされた信仰が適応の段階での困難を乗り越える力になっていることをコングレガシオン教会信者の移動と定着の特徴として指摘できる。

本研究で明らかにした「旅する文化」を生きる信者らの行動様式にはトランスナショナル性が組み込まれている。普段の活動で彼らが実践する「訪問」を見てみよう。これは遠くに住んでいる信者（宅）を訪れて信仰体験について語り合い、互いの生活を励まし合う宗教的な機会として考えられており、若者には同じ信仰仲間としての男女の出会いの場としても機能している。本研究の調査では、スペインの教会でフランス、ベルギー、ポルトガル、ブラジル、日本の教会ではブラジル、フィリピン、イタリア、イギリスの教会ではフランス、イタリア等から普段の集会に訪問を受け、また訪問する姿を目の当たりにした。そして、その「旅する文化」は信者に当たり前のこととして理解されていることを確認した。目立った宣教活動を行わないものの対面接触的なコンタクトを様々な土地に求めて移動する彼らの姿は、グローバルなトラックを彼らのペースで悠然と走る周回遅れのトップランナーのようにみえる。

（４）コングレガシオン教会の移民 1.5 世信者の葛藤とアイデンティティの行方

宗教は移民の移動と定着において精神的かつ社会的にサポートする機能を持っている。移民の子ども世代に宗教はどのような役割を果たすのか。スペインと日本のコングレガシオン教会信者（移民 1.5 世）の内面的葛藤について考察した。対象は 17 歳から 26 歳の男女 21 名（男子 17 名、女子 4 名）で、スペイン・日本での滞在期間は 8 年から 17 年である。内面的葛藤には、①身体的特徴による葛藤、②言語と就学における葛藤、③宗教による葛藤、という 3 つの葛藤が確認できた。宗教は、彼らの葛藤を解消しながら自身のアイデンティティの確立（精神的安定）に役立っていると答える者が多かった。

①身体的特徴による葛藤　スペイン：モロッコ移民に対するスペイン社会の排外主義と比較するとラティーノ差別はましだと語る者が多いが、インタビューイの肌の色によって体験は異なっている。ブラジル人はヨーロッパ系と褐色系に大別でき、前者はスペイン語を話す限りにおいて差別される体験は少なく、褐色系は少なくない。日本：程度の差はあれ、多くの者が差別された体験を語る。

②言語と就学における葛藤　スペイン：10 歳以降に移住した子供にはスペイン語で日常会話ができるようになっても学校教育についていけず落第して就学に躓いているケースが多い。大学に進学した者は 17 名中 2 名である。日本：インタビューイ（4 名）は全員就学前に来日した。2 名は日本の学校教育を受けて大学に進学した。もう 2 名は小学校時代にいじめを経験したためにブラジル人学校に通うようになった。大学に進学した者のうち 1 名は日系ブラジル人であることを有利だと感じている。

③宗教による葛藤　スペイン・日本：聖書に婚前交渉や飲酒・喫煙は禁止と書かれていることから、思春期になると教えと自分の気持ちに葛藤が生じる。ある男性（日本）は中学の頃に不良だったというが、聖書の教えがあったがゆえに私生活と教会の生活のギャップに苦しんだ。またある女性（スペイン）は、教えに従って長髪を保ち、いつもスカートを着用することに抵抗を感じたが、そのおかげで非行に走らず守られたと語る者がいた。

ヨーロッパ系で幼少の頃にスペインに移住して育ったため、言語と意識の両面で自他ともにスペイン人だと考えるインフォーマントがいたが、日本のインフォーマントには外見的特徴から日本人に見られてもそのように答える者はいなかった。こちら（スペイン・日本）とあちら（ブラジル）のどこにも属しえないアウェーにいると語る者がいる一方で、少数だがどちらにも属していると語る者もいる。この違い（葛藤の有無）を生むのは言語の習得度と外見的特徴にあるとみられる。しかし、教会は「ホーム」だという認識がどのインフォーマントにも共通しており、それが彼らの葛藤を乗り越えさせている。ある男性は学生時代に日本からニュージーランドに留学し、そこでも教会に通っていた。彼にとって教会には国の違いはなく、「それがあるからどこにでも行ける」というナショナルを超えた場所だという。ただし、どのコングレガシオン教会も構成員はブラジリアン・ディアスポラであることを考慮に入れねばならない。

（5）アセンブレイア・デ・デウス教会とブラジル人カトリック教会のスペインでの展開

①アセンブレイア・デ・デウス教会　アセンブレイア・デ・デウス教会（以下、アセンブレイア教会）はブラジルで最大のプロテスタント教団である。しかし、ベレンやマドゥレイラ等のいくつかの会派に分かれており、実質は様々な教会の集合体といえる。そして、牧師のパーソナリティや経験が教会の規模に違いを生んでいる。信者はアセンブレイア系の教会群を都合に応じて変更することがあり、教会と信者の流動性は高い。バルセロナ市には 5 か所のブラジル人のアセンブレイア教会があるとみられ、本研究で調査した教会はベレン会派に属しており、バルセロナでは規模が一番大きいとされる。本部教会はサンパウロ市にあるが、アメリカ合衆国におけるブラジル人宣教を目的にフロリダに合衆国本部が 1995 年に設立された。ここを拠点に中南米以外の宣教活動が行われ、ブラジル人牧師を派遣するほか国外拠点を経済的に支援している。スペインには 6 か所の教会がある。バルセロナの教会は、2006 年にスペイン宣教を目的に、一人のブラジル人牧師がブラジル人が多く住んでいたサンタコロマ市（バルセロナの隣町）に派遣されたことに始まる。彼はスペイン人の教会を借用して活動を開始。すぐにブラジル人信者数が 120 人を数えるようになった。しかし、2008 年の経済危機で信者の多くが失業し、帰国者の増加で信者数が減少した。牧師も別の教会を開くために異動して、現牧師は 3 代目である。彼は 2010 年にバルセロナに派遣された。夫婦で 1 年間のインド宣教の経験があり、ブラジルではペルナンブコ州の教会を盛り立てた。彼がスペインに到着したころ、信者数は 70 名に減っていた。宣教活動に力を入れた結果、2015 年に 150 人となり、2018 年 8 月現在で 306 名である。信者は圧倒的にブラジル人で、スペイン語圏出身者は 12 名である。ブラジルから信者だった者もいるが、半数以上がスペインでカトリックから改宗したか、他のプロテスタント教会信者だった者である。教会では、集会と聖書勉強会が週に 1 度行われ、信者は 7 つの部（幼年部、少年部、青年部、女性部、社会福祉部、宣教部、音楽部）に分かれて活動している。現在の活動拠点は、300 人が収容できるスペイン人の教会を借用している。コングレガシオン教会が信者ネットワークを軸に結束し展開していったのとは異なり、この教会では牧師夫婦の宣教活動と信者らが彼らに寄せる信頼が凝集力を生んでいる。

②カトリック教会　二つのプロテスタント教会と比較すると、ブラジル人のカトリック信者の活動はそれほど活発ではない。バルセロナ市（教会のミサ）とサンタコロマ市（ホザリオの家庭集会）で活動しているのみで、ビゴ市では確認できなかった。ブラジル司教会議は外国のブラジル人コミュニティに神父を派遣しているが、担当者のアレサンドロ・ルフィオニ司教によるとスペインから派遣依頼はないということである。彼はポルトガル語とスペイン語の言語の類似

性が理由にあるだろうという。バルセロナ市では 2000 年代半ばごろからポルトガル語でミサが開かれていた時期があった。それは大学院に留学していたブラジル人神父らが自主的に継続していたもので、最後に担当した神父（現在はブラジル・リオグランデドスール州在住）によれば、彼が留学した 2008 年には既に活動しており、ブラジルに帰国した 2012 年に閉鎖したということである。ホザリオの家庭集会はサンタコロマ市で 2005 年頃に始まった。あるブラジル人男性がブラジルの守護聖母であるアパレシーダに誓願を立て、周囲の知人らに参加を呼び掛けたことがきっかけになった。月に一度メンバーが交替で自宅に聖母像を祀り、20 名ほどの参加者を受け入れる。この家庭集会はアセンブレイア教会の家庭集会と違って教会活動の一部に位置付けられておらず、あくまでも個人的な活動として小規模に続けられている。

一方、バルセロナ市のサン・ラモン・デ・ペニャフォート教会で 2016 年 11 月にブラジル人神父のイニシアティブでミサが始まると、1 年半後には 100 家族が参加するようになった。メンバーは主として友人や知り合いのネットワークとフェイスブックを通じて集まった。それは、コングレガシオン教会のように信者ネットワークの集結でなく、アセンブレイア教会のように牧師を中心とした宣教活動の結果でもない。しかし、こうした凝集力が半ば自発的に生まれるのは、カトリック教会が教会権力を中心とする求心力と信者を集める潜在力を持っているからだといえる。神父はバルセロナ大司教区の司祭であるために、このミサは教会活動の一環に組み込まれている。これによってブラジル人信者の恒常的な教会活動が保証されることになった。しかし、活動には制約がある。ブラジル流の賑やかなミサのスタイルは伝統を重んじるスペイン人神父らに不評で、それを前面に出すとポルトガル語ミサが閉鎖されるようになるかもしれないからである。

なお、3 つの教団信者（コングレガシオン教会、アセンブレイア教会、カトリック教会）に対して質問紙調査（対象者：コン教会 52 名、アセ教会 67 名、カト教会 39 名）を行った。二つのプロテスタント教会では非熟練労働者の出稼ぎが大半を占めるが、カトリック教会では多国籍企業の駐在員、医師、弁護士、建築技師といった専門職に就いている者もおり、信者の社会層に幅がみられる。これは、コン教会とアセ教会の信者の学歴が高卒（55.8%、62.7%）に集中しているが、カト教会には社会層の幅が確認できる（高卒 33.3%、大卒 25.6%、院卒 23.1%）ことと符合している。また、スペイン移動時に教会の信者を頼ったという割合が、コン教会（36.8%）が最も高く、アセ教会（20.9%）、カト教会（0%）となっており、コン教会の信者ネットワークの強さが確認できる。

（6）イギリスにおけるブラジル系宗教コミュニティ

スペインの事例を比較検討することを目的に、イギリス（2019 年 8 月 1 日から 14 日）でも調査を行なった。文献調査によれば、イギリスのブラジル人人口は 12 万人で、スペイン（8.6 万人、2016 年）を上回る。ブラジル人移民の流れは 1990 年代に始まっており、スペインより 10 年ほど早い。調査では、コングレガシオン教会（ロンドン市内 1 か所、オックスフォード市内 1 か所、スウィンドン市内 1 か所）、カトリック教会（ロンドン市内 3 か所：St Mary of the Angels Chapel, St Margaret Clitherow Church, White Chapel）、プロテスタント教会（ロンドン市内 1 か所：Cathedral International）を訪問し、信者の活動状況を視察した。現地で、ロンドン市内北東部にブラジル人集住地があることがわかり、Willesden Green と Willesden Junction を訪問した。そこには Brasil Avenue, Barril, Requinte Brasil といったポルトガル語名を冠したレストラン、美容院、ブラジル食材店があるほか、ブラジルの多国籍プロテスタント教会として知られるユニバーサル教会がある。

イギリス全土にコングレガシオン教会は 9 か所あり、すべての拠点が公民館を借用している。集会は 1998 年から行われるようになっており、実質的な開始年次はスペインと変わらないものの、活動はスペインと比べるとそれほど活発でなく組織化も進んでいない。この理由について、ある信者はイギリスの経済的豊かさを理由に挙げた。ブラジル人は豊かさを求めるがあまり個人主義的になり、本来の人間的な温かさを忘れ、神を忘れているというのである。一方、ロンドン市内にはポルトガル語のミサを開く 6 つのカトリック教会がある。2004 年に活動を開始したブラジル人教区がウエストミンスター教区において公認されている。市内 White Chapel のセント・アナ教会が中心教会で、ブラジルから派遣された 3 名の神父が在住している。司牧グループが 16 あり、組織化された活動がみられる。スペインのカトリック教会と比較すると、はるかに活動の規模は大きい。また現地調査で、2013 年にイギリスで生まれたブラジル系プロテスタント教会（カテドラル・インターナショナル教会）が活動していることが分かった。この教会は他のヨーロッパ諸国や日本（茨城県牛久市）に下部教会を設け、組織的でトランスナショナルな展開をしている。一時期日本の教会の維持費を経済的に支援（送金）していたことが特筆される。

なお、本研究の申請時に予定していなかったが、今回の研究を発展させることを目的に、在日ブラジル人の宗教と幸福度に関する準備調査を行った（2020 年 1 月 25・26 日、2 月 2・9 日）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 山田政信	４．巻 第70巻
２．論文標題 ディアスポラの公共圏としての在日ブラジル系プロテスタント教会	５．発行年 2019年
３．雑誌名 天理大学学報	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山田政信	４．巻 －
２．論文標題 旅する文化を生きる人々―スペインのブラジル系キリスト教会―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 現代宗教2017	６．最初と最後の頁 55-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takahashi, Norihito	４．巻 57-2
２．論文標題 Japanese Religions in Contemporary Europe: Social Roles of Cultural Activities	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋大学社会学部紀要	６．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 山田政信
２．発表標題 トランスナショナルな宗教コミュニティ：スペインにおけるブラジル人移民の事例
３．学会等名 アメリカス学会第 23 回年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 "From Refugees to Supporters: Conversions Made By Religious Organizations in Contemporary Japan"
３．学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology RC22 Sociology of Religion（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 "Immigration and Religious Pluralisation in Contemporary Japan"
３．学会等名 The University of Manchester, East Asian Studies Research Seminar Series, the UK（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 "Migrants and Religious Diversification in Contemporary Japan"
３．学会等名 Centre for the Study of Japanese Religions, SOAS University of London（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 "Diverse Muslim Migrants in Contemporary Japan"
３．学会等名 Universita degli Studi di Napoli "L'Orientale" (University of Naples "L'Orientale"), Naples (Italy)（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 "Development of Support Activities for Foreign Residents by Religious Organisations in Japan"
３．学会等名 “Religion and Welfare in East Asian Contexts: A Research Round-Table” of the Centre for Religion and Public Life and East Asian Studies, the University of Leeds, the UK（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田政信
２．発表標題 ブラジルのなかのアフリカ
３．学会等名 天理大学アメリカス学会第22回年次大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山田政信
２．発表標題 ブラジル系ペンテコステ派教会という宗教コミュニティ
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Takahashi, Norihito
２．発表標題 Multicultural Coexistence and Religion in Contemporary Japan (6): Support Activities for Technical Intern Trainees and Refugees by FBOs
３．学会等名 The 2nd Annual Conference of the East Asian Society for the Scientific Study of Religion（国際学会）
４．発表年 2019年

1．発表者名 Yamada, Masanobu
2．発表標題 “Os evangelicos brasileiros no Japao e na Espanha: a formacao da comunidade pentecostal na era de globalizacao"
3．学会等名 Departamento de Sociologia, Universidade Estadual de Londrina, Brasil（招待講演）
4．発表年 2017年

1．発表者名 Yamada, Masanobu
2．発表標題 "Dialogos do Observatorio sobre Migracoes e Mobilidade no Brasil"
3．学会等名 Observatorio das Migracoes Internacionais, Universidade de Brasilia, Brasil（招待講演）
4．発表年 2017年

1．発表者名 Yamada, Masanobu
2．発表標題 “Os evangelicos brasileiros no Japao e na Espanha: a formacao da comunidade pentecostal na era de globalizacao"
3．学会等名 Programa de Estudos Pos-Graduados em Ciencia da Religiao, Universidade Pontificia Catolica de Sao Paulo, Brasil（招待講演）
4．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

1．著者名 Wendy Smith (編集), Hirochika Nakamaki (編集), Tamasin Ramsay(編集), Louella Matsunaga (編集), Peter Clarke, Yoshihide Sakurai, Susumu Shimazono, Hiroshi Iwai, Benjamin Penny, Shamsul A. B., Hidetake Yano, Barbara Watson Andaya, Tomoe Moriya, Masanobu Yamada, Ronan Pereira, Hideaki Matsuoka, Nobutaka Inoue	4．発行年 2019年
2．出版社 Amsterdam Univ Pr	5．総ページ数 378
3．書名 Globalizing Asian Religions: Management and Marketing	

１．著者名 Henri Gooren (編集), Usarski, F., Shoji, R., Rodriguez Plasencia, G., May May, E., McKenzie, G., Apud Pelaez, I., Clara, M., Ruiz Santos, R., Valdenegro, A., Cordova Quero, H.,da Costa, M., Tomita, A., Valdrigue, A.,Saizar, M., Guerriero, S., Loundo, D., Younger, P., Strange, S., Masanobu Yamada	４．発行年 2019年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 1600
３．書名 Encyclopedia of Latin American Religions	

１．著者名 高橋　典史、白波瀬　達也、星野　壮	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 234
３．書名 現代日本の宗教と多文化共生	

１．著者名 井上順孝、高橋典史、高山秀嗣、武井順介、藤井修平、虫賀幹華、隈元正樹、李和珍、小林宏至、藤野陽平、矢野秀武	４．発行年 2019年
２．出版社 宗教情報リサーチセンター	５．総ページ数 234
３．書名 海外における日本宗教の展開――21世紀の状況を中心に	

〔産業財産権〕

〔その他〕

山田政信「NO TINC POR! 「私は恐れない」－暴走テロに立ち向かうバルセロナの人々－」『Mネット』（移住者と連帯する全国ネットワーク）195：34-35，2017年12月
高橋典史「ムスリム・コミュニティと大学の連携の可能性」『Mネット』（移住者と連帯する全国ネットワーク）208:34-35，2020年2月
高橋典史「「小さな教会の日本語教室。「支援のバトン」をつなぐ人々」
『ニッポン複雑紀行』難民支援協会、2019年11月（https://www.refugee.or.jp/fukuzatsu/norihitotakahashi01）
高橋典史「英国マンチェスターにおける共生の模索」『Mネット』（移住者と連帯する全国ネットワーク）203: 34-35，2019年4月

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高橋　典史 (Takahashi Norihito) (50633517)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	